
エルを捕まえろ！！(The Hunt for phantom thief Raphael！！)

腹黒伯爵

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪盗ラファエルを捕まえろ！！（The Hunt for p
hantom thief Raphael!!）

【Zコード】

Z98500

【作者名】

腹黒伯爵

【あらすじ】

怪盗 それは、フィクションの世界でしか存在しないものだった。
義賊 それは、架空の存在。

2002年 首都・東京
奴は、現れた！

「警視！第1班より連絡。本館正面玄関に奴が出現！」

「同第2班より連絡。右側に出現した奴はおとつと判明！！」

攬乱される警察

「怪盗、義賊だと！？そんな存在が明確な法体系下の近代社会で存在できるのか？それは疑問だよ。」

「怪盗だろうが、義賊だろうが如何に善行をつもうが、明確に法に触れた段階で犯罪者だよ。法を変えない限りね。そして、それは法の下の平等という近代法学を犯すことになる。」「待て！怪盗！..！」

学者のような探偵？

「次の目標はここですわ。」

「如何に善行を表面上行つても、いすれは化けの皮ははがれるものね。」

怪盗とその仲間たち。

「では諸君。つぎはここが目標とこういふことでよろしくですか？」「結構でしょうな。」

暗躍する秘密結社。

「怪盗だと？」

「いくら怪盗といえども、このからくつには判るまい。奴は義賊であっても正義の味方ではないのだからな。」「

たぐらまれる陰謀。

複雑に思惑が入り乱れる、現代のバビロン東京、首都圏を舞台に今、怪盗と警察、そしてそれ以上の「戦争」が幕を開ける。

「災いなるかなバビロン、そのもろもろの神の像は砕けて地に伏したり」

（旧約聖書イザヤ書第21章・バビロンの滅亡「機動警察パトレイバー劇場版1」より）

怪盗ラファエルを捕まえろ！！

始まります

（2010/11/25・全面改定）

1・0 そして役者はそろつた

2002年5月12日 東京都千代田区霞が関 警視庁本庁舎
10:00

警視庁本庁舎の一角は非常に重苦しい雰囲気に包まれていた。ここ最近、「怪盗」等というファイクションの中しか存在しないと思われていたものが、世間を騒がせていたためである。

「手掛かり、無し、か・・・」

本来、窃盗事件は警視庁刑事部捜査第三課が主管する案件である。ところが、本件はその連續性・知性的な手口より、知能犯担当の一課に役が回ってきた。

「どうせなら、一課のほうがよかつたのに・・・」

思わず愚痴をこぼす幹部が続出しているこの案件、「連續窃盗事件」、後の「怪盗ラファエル」と呼ばれることになる怪盗と警察の「戦争」の幕開けとなることを、この時点では誰も知るよしはなかった。会議はいつになるかわからない愚痴の言い合いに収集し始めた。その時、上座に座る男が決断を下した。

「諸君の話を聞いていると、専属のチームを作成し、この事案の対処を行うようにしたほうがいいと思われる。数日内にチーム編成を行つので、そのように。」

5月15日 警視庁内会議室 10:00

「もうそろそろかね。」

警視庁刑事部長黒崎孝也が部屋の時計を見ながら言った。窓の外では皇居の新緑が見える。

「もうそろそろかと思います。」

刑事部捜査一課課長中森行典がそれに答える。

「最善のチームなのだろうね? この部隊は。」

「はい。本庁・所轄の垣根をこの際破壊し、ベター・チームを創設

しました。」

「なぜベストではないのかね？本案件、メディアへの露出は控えて
いるが場合によっては警察の汚券にかかる案件なのだよ？」

「部長、本案件は長期化します。最悪、警察総力をつき込む必要が
あるでしょ。それまで、このチームで防ぎ切ります。」

黒崎の疑問に、中森が答えた。

「つむ・・・君の判断を尊重しそう。ベストを貰へし、結果を残して
てくれ。」

その時、会議室のドアがノックされた。

「失礼します。千葉です。」 捜

査一課のコントローラー、捜査案件の切り盛りを担当する管理官
の千葉百兩の声がした。

「入りたまえ。」

黒崎が返答をするとドアが開き、数名入ってきた。

「掛けたまえ。」

中森の声に反応し、彼らは椅子に座った。

「君たちを呼んだのはほかでもない。」

黒崎が言葉を区切った。

「昨今、怪盗等という正体不明のものが首都圏を中心に出ておる。
よつて、我々・神奈川県警・千葉県警・埼玉県警は極秘に調整を行
い、無論各公安委員会にも調整済みだが、警視庁を主体とし、本庁
刑事部捜査一課内に対策班を設置し、この事態の対処に当たること
となつた。」

会議室にいた全員に緊張感が走った。この案件が捜査一課の担当にな
つて以来、事態の進展をこの目で見てきた連中ばかりである。

「指揮命令系統上、捜査一課とは別個になる。また、我々以外の各
県警の上層部しかこの事は知らない。管理責任者に千葉君を充てる
こととする。」

「はい。承ります。」

「次席責任者として、高富君。君にやつてもらいたい。」

「承ります。」

「内海君。君が現場の責任者だ。隨時、各県警より2名の出向者を入れて増強を図るが、とりあえずは内海班で処置を頼む。」

「承知しました。」

同時刻 某所

「刑事部はうまくえさに食いついたか。」

スーツを着た男が同じ井出達の男に言った。

「ええ、うまく食いつきましたよ。警視庁刑事部は警察庁刑事局と調整して広域捜査班を立ち上げるようです。」

「そうですか。なかなか進まないと思っていましたが、急に動き出しましたね。」

「黒崎さんは次の次の次ぐらいを狙っていますからね。刑事畠出身で総監・長官はあまりいませんから、これを機会に一気に狙う気なのかもしれませんね。実際、エースをつき込んでいませんから。」「どういうことですか？」

別のスーツ姿の男が興味を示した。

「一課案件ということで処理する話もあったのです。実際のところは・・・ただ、黒崎さんが潰しましてね。ここで、大塚さんと組んで広域捜査班構想、ひいては今回の件で日本版FBI構想をぶち上げて一気にポイント稼ぐ作戦に出たのですよ。マスクミミ受けしますしね。この事案。」

「マスクミミ受けするようにするのは、我々4騎士だよ。」

「そうですね。」

その場にいた全員が苦笑した。

「いざれにしても、ラファエルも刑事部も頑張つてもらわねばならない。そのために、我々はここにいるのだし、これからも行動をする。そのことを、各自忘れないで頂きたい。」

「その辺は承知している。」

「では、今回の会合は解散にしたい。次の目標は資料のとおりとし

たいが異存はないだろ？

「異議はない。」

同じくスーツ姿の男の声に、皆が賛同した。

「では、次の行動は原案通りといふこととする。事務手続に関しては、いつも通りとしたいが出来るだろ？」

スーツ姿の男たち全員の首を縦に振るジェスチャーに司会役の男は納得した。

資料にはこう書かれていた。 商事・代表取締役社長 小田修誠
と・・・

1・1 そして役者は揃つた。

2002年5月20日 東京都中野区 聖ポール学院高等部校舎
10:30

やつと2時間目が終了した。理数系の授業は疲れる。私こと浅海雄彦、学業はほどほど、文系科目は強いが理数系はかなりメタメタ、で、成績は中の上。運動神経はママいいほうかと自分では思つてゐる、「ぐく」く普通の高校2年生。進路はまあ・・・私立の法学部に行こうかな?と考えている。ある親交のある大学生に影響を受けて・・・政治学も面白いかなと考えている。僕は、歴史が好きだ。歴史が好きだ。歴史が大好きだ。人間の営みというものを研究することは面白いと思つ。

3時間目は日本史の時間だ。その親交のある人間曰く、日本史では人名は複雑だけど受験には使いやすい。暗記科目じゃないよ。流れで覚えるのだと言つていた。うむ、彼の言ひ通りだと思つ。

「浅海、このニュース知つているか?」

友人が今朝の朝日新聞を片手に声をかけてきた。

「何のニュース?」

「昨夜、また出たらしい。怪盗ラファエルが!」

やつぱり。ここ数ヶ月、東京都内のみならず首都圏全域に出没している怪盗の話題で、ローカルニュースは持ちきりだ。フジのスーパーニュースではアンドウさんがいつもの表情を浮かべながら、そのニュースを讀んでいるのをよく見る。

「で、その怪盗がどうかしたつて?」

僕は友人に尋ねた

「いや、どんな奴なのかなつて思つてさ。世の為人の為に盗みを働く

くなんて、江戸時代のネズミ小僧じゃあるまいし、現代のしかも2
世紀の東京に出現するなんてさ。いったいどこのどなたなのかな
つて思つてさ。」

「で、俺に話を振つたと？」

「なんてやつだ。と思いながら苦笑した。

「少なくとも言えるのは日本人だわな。住所も戸籍も電話番号も持
つてゐる。で、おそらく、これは推測だけど年を取つてはいないわ
な。こんなことは暇人にしかできない。もつと言うと、なんという
か、歪んでいるのだよ。善惡の判断が未だに弱いといふか、搖らい
でいるのだよね。この世に絶対的な善惡などないのにや。」

友人の顔を見る。ここまで創造を聞いて、キヨトンとしている。
「どうも」コースを見ていると、盗みに入つた後の警察の調査でい
ろいろと見つかるから印象操作で悪人に見えているのじやないかな
？そもそも保有者も調べて白じやないと、問題があるような気が
するんだよなあ・・・」

友人の顔を再び見る。

「何か？」

「いやあ、だんだんお前が探偵に見えてきたよ。」

そう言って肩を叩く友人の相手をしながら、考えを切り替えて次の
日本史の準備をすることとした。

神奈川県横浜市西区 横浜駅前 同時刻

「つまく捜査本部内には潜入できただな。」

横浜駅構内のスープ屋に一人のスーシを着た男が向かい合つて座つ
ていた。

「ええ、一応県警刑事部からの出向ということで潜入できました。
これから、特捜内の情報を流せますよ。」

「全く、組織内でスパイのまねごとをせねばならないとは世も末だ

な・・・

「仕方がありません。この件は我々の威信もかかつておりますが、世の為人の為なのですから。」

若いほうの男がスープを飲みながら言った。

「そうではないよ。世の為人の為ではない。国家のためなのだよ。」

「国家ですか・・・天下國家をしたり顔で語る連中にろくなやつはないなかつたですよ。」

「大学で日本近代史、特に2・26と警察の関係で学位を取つた君らしい言い方だな。まあ、分かる。だが問題は、今この段階での危機なのだよ。」

「やるだけはやつてみます。期待はしないでくださいよ。」

そう言つて若いほうの男は笑つた。

「お前さん、食つねえ・・・俺はほとんど食つていないので。」

そう言つてもう一方の男は若いほうの男の皿を覗き込んだ。からだつた・・・

「まあ、この職業は体力勝負ですからね。これからもつと体力を使うことになるのでしょうか?」

そう言つて彼は笑いかけた。

「まあな。」

聖ポール学院高等部校舎 12:30

学食で昼食を取つていると、横に一人の男が座つた。僕と同じように眼鏡をかけ、背の高いこいつのことによく知つていて。中学時代からの腐れ縁だ。

「見事な推理だつたよ。浅海。」

「ありがと。御手洗。」

御手洗史彦、両親ともバンコクに駐在しているとかで、今は都内の親戚の家に厄介になつてゐるらしい。まあ、そんなところもうちと同じ境遇だ。うちの場合は父親が外交官でいまはベトナムに赴任し

ている。ちなみに単身赴任だ。なんでも御手洗のところは支店長なので、夫人にぜひ同伴してほしいとのことらしい。全く、海外赴任は大変だと思う。

今年の夏はぜひベトナムに行つてみたい。ホーチミンのミニアやらベトナム戦争の兵器が展示してあるなんて、近代史マニアから見たら涎ものだ。

「で、小説や漫画だとお前さんのようなポジションの人間だと、「名探偵」やら「少年探偵」と呼ばれるようになるのだが……」
そう、こいつは結構なオタクで、その点も僕との相性が良い。よく連れだって、中野や吉祥寺で遊んでいる。

「おいおい。僕は銭形のとつあんでもなければどこの少年探偵でもないのだよ。ごくごく普通の少年だよ。それに、得体の知れない薬品を飲まされて、「体は子供、頭脳は大人！」なんて言いたくないよ。」

そうなのだよ。あれはあくまでもフィクション。現実には起こらない。なぜなら……

「法の問題、だよね。そもそも司法警察員でもないのに逮捕権限があるなんておかしいのだよ。どこぞの少年探偵たちは。」

そう言って、史彦はタヌキうどんをすすつた。ちなみに僕はラーメンを食べている。

「そうだ。もうそろそろワールドカップだな。」

そうだった。ワールドカップがもうそろそろ開幕する。日韓共催だけ……

「チケットがあればね……見に行くのだけど。」

「どこのB A Rでもパブリックビューのチケットが出ているらしいじゃないか？おじさんとは見に行かないの？」

「おじさんねえ……」

彼の伯父は財務省で官僚をしている。その伯父さんとこいつのがこれ

またすごいサッカーファンらしい。

「その時、ワシントン出張らしい。ものすごく悔しがっていた。」

そう言って史彦は大笑いした。

「なに！ワシントンだと！？F R B の連中はそんなに俺のことが嫌いか？！だったらアメリカ国債でも売つてやる！」と冗談で言つたらしい。財務省のその課の人、全員苦笑していたらしいけど・・・

「水野の伯父さんの世代だとメキシコオリンピックを知つているわけだよね・・・そりや燃えるわな。ワシントンには行くのだろう？」
「そりや勿論。ワシントンでも絶対見てやると豪語していたらしい。」

学食内の別のテーブルでは、如何にもかわいいという女子生徒3人が向かいあつて昼食を食べていた。

「麻耶、どうだった？昨日の私の活躍。」

隣に座つた遙がそんなことを言つている。全く、人の気も知れないで・・・

私の名前は、浅海沙耶。聖ポール学園中等部に通う2年生です。と、誰に説明しているのだろう？さつきも言つたけど、隣に座つているのが同じクラスの椎名遙。で、その向かいに座つて渋い表情を浮かべているのが同じクラスの大通寺麻耶。

「遙ちゃん。もっと小声で。」

麻耶がちょっと厳しめに遙に言つ。

「ごめん。で、どうだった？昨日の私の活躍は？」

「どうつて言われましても・・・」

困った表情を浮かべて麻耶が私に助けを求める。おこおい遙さんや、いくらなんでも空氣を読んでよと思う。

「今回、意外とあつさりしていなかつた？」

そう助け船を出す私。

「やつなのよね・・・」

うなずく遙。おいおい、女性の私から見てもその表情は結構かわいいぞ。お兄ちゃんには「お前はかわいげがないよな。」とよく言われるのだから、遙の表情と比べて若干へこむ私。

「警察も陣容を整えているのではないでしょつか?」

麻耶がそう言つた。

「今日の田経新聞に、警察幹部のコメントが載っていました。これからは警察の最精鋭部隊を導入して、オール警察軍で警備すると。」

お兄ちゃんの影響からか、歴史系に興味のある私。おいおい、オール警察軍って、いつの時代ですか?

「怪盗ラファエルもいよいよ年貢の納め時ですか

ちらつと横田で遙を見ながら囁つ私。その表情はきっと意地悪く見えるだろ?!

「や、そんなことないわよ!」ああ・・・やつぱりだ。声を出しちゃつた。

「ちよつと遙りやん。」慌てて

押さえる麻耶。意地の悪い小魔性的な私。すぐに表情が出る遙。そしてそれを抑える麻耶。どこかで見たことある関係だぞ・・・

「じめん。ひどいよ沙耶。怪盗ラファエルは無敵なのだよ。」

今度は小声で囁つ遙。

「はいはい。」

そう言つて笑う私。そんな事を云いながら、私はあの日のことを思い出していた。

2002年1月6日 神奈川県鎌倉市 田覚寺 07:00

その日、私たちは冬休み最後の週末を鎌倉市内で過ごしていた。遙

がどうしても鎌倉に行きたいと1ヶ月ぐらいから言っていたのだ。中学1年生だけで泊まることに当初は親もみな反対したが、結局うちのお兄ちゃんと、お兄ちゃんと親交のある久瀬絵里さんが保護者代わりになつて、ホテルを抑えてくれた。土曜日に鎌倉に入つて大仏や鶴岡八幡宮を見学した私たちは、翌朝、海沿いにあるスターバックスでコーヒーを飲みたいという絵里さんの希望にお兄ちゃんがついて行つて、私たち3人は円覚寺から富士山が見えるという絵里さんの話を聞いていたので、円覚寺に来ていた。

「うわあ・・・きれい。」

冬の関東は空気が澄んでいるとのことでも富士山もはつきり見えた。やはり、冬の円覚寺はきれいだと思う。山頂の茶屋で御抹茶を頂きながら見る富士山というものはそれはそれで美しく、知り合いの外国人にもぜひ見せたいと思つた。その時、突然眩しい光が私たちを包んだ。

「ここは・・・？」

私たち三人、外の世界とは切り離されたような感覚がした。そう、たとえて言うなら、光の世界に包まれたような感じ・・・

「あなたたちに、私の声が聞こえますか？」

不意に誰かに話しかけられた気がした。

「ねえ、私に話しかけた？」

遙が聞いてきた。

「いえ、話しかけていない・・・じゃあ誰？」

「あなたたちの心に話しかけています。」

胡散臭いことこの上ない。お兄ちゃんがかなりアレな性格なので、知らずに移つてしまつたのかもしれない。

「あなたは誰のですか？」

麻耶が尋ねた。

「私の名はラファエル。」

正直その時、心の中とはいえ絶句した。天使が降りてきたのだ。「どうしようもない僕に天使が降りてきた」じゃないけど、天使が自分の心に話しかけている。落ち着け、落ち着くのだ。

「大天使ラファエル。なぜあなたが私たちに話しかけてくるのです？」

「いま、この世界は邪悪に満ち満ちています。」

まあ、確かに・・・去年はニューヨークでの事件があつたし、合衆国はそれによってアフガニスタンで戦争を始めた。確かに、世界は邪悪に満ちている。ただ・・・

「大天使ラファエル。あなたの言つ邪悪とはなんですか？」
麻耶が質問した。おそらく私と同じ考え方なのだろう。それは質問しないといけない。

「人はみな、心に神を宿しています。その神は、人それぞれ違うものです。その違いを理由にして人はいま、憎み、争っています。世界は邪悪に満ち満ちています。」

良かつた。これでキリスト教だのイスラム教だの宗教がらみの話が出てきたらうそくさいことこの上ない。

「大天使ラファエル、なぜ私たちに話しかけてきたのですか？そこまで世界の現状に御嘆きなら、その御姿を全世界に見せ、直接お声をかければよいではありませんか？」

私は思わず聞いた。

「今の人々は、私が姿を見せたところで信じようとはしないでしょう。あなたの方の自然に対する素朴な感情に私は掛けようと思つたのです。」

確かに・・・超常現象で食つてているテレビの業界人のなんと多いとか。それに対する評論家もそれで食つてているし・・・科学全盛の時代と人は言うけど、最も怖いのはそんな人のあくなき欲望じやないのだろうか？とお兄ちゃんが良く言つていたのを思い出した。

「大天使ラファエル、私は何を摩れば良いのでしょうか？」

遥が乗ってきた。そこ、乗るのじゃない！

「私は、もう黙ることは許されないと思います。ですが、今私の言葉に耳を傾ける人はいないでしょう。みなさんにお願いします。今の世界から少しでも欲望を除くようにしてください。そして、神の言葉に耳を傾けるようにしてください。あなた方に力を貸します。椎名遥さん。」

いきなり遥は自分のフルネームを呼ばれて驚いたようだ。

「はい？」

「あなたに力を貸します。大道寺麻耶さん、浅海沙耶さん。椎名遙さんに協力してください。」

そう言つて、元の風景に戻つた。

「なんだつたの一体……」

私は思わず呟いて、時計を見た。時間は……経つていなかつた。

「どういうことなの？」

麻耶が尋ねる。

「つまり、私たちは超常現象に遭遇したわけだと思つ。寺の中で天使にあうなんて……」

円覚寺、臨済宗の仏教寺院なのだよね……最も、最近は宗教間の対話も進んでいると聞くけど……

「これ、何だろう？」

遙の手の中に、ブローチがあつた。

「これつてもしかして、魔女っ子か変身ヒロインになつて世界を救えつてこと？」

親交のある大学生のお姉さんが言つていた。この世界に正義も悪も存在しない。人の数だけ正義と悪が存在し、互いにバランスを取るものだと……

もし、遙が変身ヒロインになるとすると、私たちは何から世界を守らないといけないのだろうか？人類から？まさか……

「遙さん、あなたにこのブローチを授けます。このブローチに願い

を込めれば、魔法・超能力が使えるようになります。」

「ちょっと待った！！人がいるので大声は出せないが、ラファエルのその声を聞いて、私は心の中で叫んだ。

「魔法？超能力？どういうことですか？」

「椎名遙さん、大道寺麻耶さん、浅海沙耶さん。あなたたちにはこれから世界を変えてほしいのです。世界を変え、神の、私が言う神とはいまの人類が信仰している神だけのことではありません。世界は人だけのものではありません。そのことを再び伝えるために手伝つてほしいのです。」

「で、あたしにこれからどうしろといつのですか？」

遙が尋ねた。

「それは、あなた方で考えてください。私にできるのはお願ひと、その準備だけです。迷い、困つたら尋ねてください。」

そう言つて大天使ラファエルとの交信は切れた。

「・・・どうしよう。」

麻耶が私に聞いてきた。

「どうしようつて言わわれても・・・」

正直、分からぬ。

「私決めた。私、怪盗になる。」

ええ！なんですか？！それ！！

2002年5月20日 東京都中野区 聖ポール学院高等部校舎

13:30

とまあ、そんな感じで「怪盗ラファエル」は誕生したのです。最初は新聞やテレビで報道される法に触れた人物の調査とそれで困つたことになつた人からの盗みだつたのだけど、なかなか人には言えない困りごと相談のHPを作成したのだ。そこでの依頼もよくある。そしたら最近、「4騎士」と呼ばれるところからメールが届くよつになつて・・・

その情報、正確なのだよね。怖いぐらいに・・・

「今日の放課後、どうするの？」

麻耶が聞いてきた。

「今日？ちょっと用事があつて・・・例の件でね。」

私はそう答えた。

「例の件？ああ、リリアンの人と会うのだよね？成瀬さんのお姉さんだっけ？」

遙がそう言つた。同じクラスの成瀬美亜さんと一緒に、今日は成瀬さんのお姉さんをお姉さんを紹介してもらうことになつていた。

「リリアンの人か・・・たゞかしお嬢様なのだろうね。」

東京都武蔵野市吉祥寺　吉祥寺駅　17：00

大学の授業もすでに終わり、私は本を読みながらある人を待つていた。ここは、東京都武蔵野市吉祥寺。若者が多く住む街であり、住みたいまちNO.1に輝く街でもある。その吉祥寺の駅前にあるスターバックスコーヒーの店内ではジャズが流れしており、落ち着いた空間になつてている。

「お待たせしました。」

そう言つて丸テーブルのソファ側に座つた私の正面に、私服姿の女の子が座つた。

「ちょっと遅いのじゃないの？」

そう言つて、読んでいたポール・ケネディの「大国の興亡」をバツグにしまい、私、久瀬絵里は成瀬美穂に言つた。

「すみません。制服から私服に着替えていたもので。」

まあ、確かにリリアンの制服では目立つだろう。私も一応リリアンの卒業生だ。

「で、かわいい後輩の妹の頼みだから今日は来たけど、どうしたの？」

「こま、駅に未亜がいるのです。未亜の友達の案内をお願いしたいくて・・・」

まあ、そう言つことだと思つた。リリアン時代から、リリアンの生徒にふさわしくないといわれるほど吉祥寺で遊んでいたし・・・健全な遊びを・・・ね。

「夕飯はどうするの?」

「出来れば絵里さまにお願いしたく・・・」

リリアン生らしい呼び方が出来ましたね。

「もう私はリリアンの生徒じゃないから、絵里さんで良いよ。そうだね・・・女性4名で食べられるところひとつ・・・・あれ?」が良いかな?」

そう考えて私は、携帯電話を取り出してある店に電話をした。

「もしもし久瀬です。ご無沙汰しております。はいはい。そんなあ・・・今日なのですけど4名で6時に予約できますか?はい、はい。有難うござります。」そう

う言つて電話を切る。

「予約できたよ。最近できたばかりのイタリア料理のレストランにすることにした。」

その時、店内に見知った顔が入ってきた。

「未亜ちゃん!と・・・沙耶ちゃん!?」

私は驚いた。私の親友から紹介された少年の妹が、そこにいた。

「ええ!!なんで絵里さんがここにいるのですか?」

「えつ・・・2人とも知り合いで?」

そう言つ偶然も、たまにはあるものだ、私は思つ。

同所 18:00

つまりだ。ラファエルが真に求めるのはおそれく、我々が想像しているものではあるまい。」

私がワインを飲みながら言つて、向かいに座った少年はうとうと

頷いた。なんでも、今日はこのいつの母親がどうしても参加しないといけない会合に出席するとかで、晩飯を一緒に食いたいと言つてきた。まあ、ここいつと晩飯を食うのは嫌いじゃない。高校時代の自分を見ているようで結構好きだ。私、柊一樹は一浪の末、某S大学の法学部政治学科に今年入学した。まあ、紆余曲折が高校時代からありましたよ。久瀬とはひょんなことから知り合いになり、一応僕の両親は健在だけど、実家が遠いので久瀬の家に厄介になつていて。この3年の付き合いで両家とも本当の親戚みたいに仲が良い。で、この日の前の少年、浅海雄彦とは、久瀬の父親が経営している会社のパーティーで知り合つた。どうもそういうパーティーは初だつたらしく緊張しているのをさりげなくフォローしたら知り合いになつた。最も、僕もその時2回目だつたのだけど・・・

で、僕が東京に出てからはこうこう機会の度に夕食を共にしている。「柊さん、ラファエルの本当の目的って何なのでしょうね？」
「ああ。ただ言えるのは、やつはきっと盗みが目的じゃないってことだけだよね。」

その時、店のドアが開いて若い女性4名が入つてくるのが分かつた。ひょいと顔を上げたら、その先頭の女性と目があつた。

「あー、一樹君！」

そう、その女性は絵里だった。そして、

「お兄ちゃん！..」

その声は麻耶ちゃんか・・・

「すみません。あそこのテーブルと相席をお願いします。」

そう絵里は店員に言つと、彼はテーブルをくつつけて6名用の席をセッティングした。

「「めんね。」」「、良いよね？」

おいおい、そのセリフはセッティングする前に言つんじゃないのかい？そんな心の中での突つ込みを無視して、絵里たちは席に着いた。

「飲み物はどうしますか？」

私は親切に女性陣に質問をする。

「私はグラスの赤。」

「私たちはサンペレグリノをお願いします。」

飲み物の注文が終わると自己紹介タイムだ。

「先に来ておりました、柊一樹です。そこに座っている久瀬絵里の親友？ 婦？ ジヤないジヤない。大親友です。」
そう言うと絵里は頬を膨らませて、周りは少し驚いてそして苦笑した。

「浅海雄彦です。隣に座っている浅海沙耶の兄です。今日はここに来るなんて聞いておりませんでした。みなさん、宜しくお願ひします。ちなみに、聖ポール学院高等部の1年に在籍しております。」
周りからは大人っぽい、との声がした。

「浅海沙耶です。隣の雄彦お兄ちゃんの妹です。聖ポール学院中等部の2年です。」

おいおい、その感じはブラコンだぞ。全く・・・この兄妹はブラコン気味なのだよ・・・

「え・・・と。成瀬美穂です。今年、リリアン女学園の高等部に進級しました。私には姉がおりまして、その姉が絵里さま・・・じゃなかつた。絵里さんと親しくさせていただいておりまして、その縁で吉祥寺を紹介してもらおうと考えたのが今日の趣旨です。すみません。こんな大人数になってしまいまして。」
なるほど、趣旨が分かつたら問題はない。

「いえいえ。お気づかい無用です。食事は大人数のほうが楽しい。特にイタリアンは・・・では、続きをしましようか？」

「成瀬未亜です。聖ポール学園中等部で沙耶のクラスメイトです。今夜は美穂お姉ちゃんとくつついてきてしまいました。すみません。

「いえいえ。気を遣わなくてもいいのですよ。」

そう言って、いまにも緊張のあまり泣き出しそうな未亜ちゃんを宥

めた。そうか・・・見知らぬ男性がいるもな。と思つ。最後は・・・
「久瀬絵里です。そこに座つていいる一樹とはここ3年一緒に腐れ縁
です。リリアン女学園を卒業しましたが、リリアン生に思われない
ことが悩みです。」

そりやそうだ。あなたの秘密を私は知つていいる・・・

同所 21:00

中高生を20時に帰宅させて、私たちはあるアイリッシュ・パブで
飲み直していた。

「まさか、レストランで会うとはね・・・」

私はさつきまでの光景を思い出しながら言つた。

「全くだ。しかし、あのか弱そうな未亜ちゃんがあんなに食べると
はね。」

そう、未亜ちゃんは実は結構な大食いだつたのだ。それにはびっくり
りした。

「まあ、人はみかけによらないといふことさ。」

そう言つて、一樹はフィッシュ・アンド・チップスに手を伸ばした。

「うん。 いける味だ。」

ここに来るのはずいぶん久しぶりだ・・・2003年以来かな?

「変わらないね。ここのがネスも、キルケニーも・・・」

そう言つて私はギネスに口をつける。

「で、どうだつた? 大島さんは何か知つてそう?」

「いや駄目だね。」

そう言つて一樹は手を振るジェスチャーをした。

「市ヶ谷は全然情報を持つていない。これで持つていても問題だけ
ど、あそこがないとなると・・・海軍省には「ネクション、ある?
「ないのだよね・・・」

そう言つてため息をつく。私たちはある会社で嘱託としてこの4月
から勤務をしている。ひょんなことから知り合つた、大島さんとい

う人のルートを使って例の怪盗ラファエルの情報に食い込めるかと思つたのだけど・・・

「虎ノ門ラインはだめだわ。海軍省関係も記憶がない・・・
「そうか、全滅かあ・・・」

そう言って、再びギネスに口をつける私。ハノイのギネスもそれはそれでうまかったのだけど、やっぱり生が一番。

「ところで、俺らの知りあいって結構システムとパソコンが多いと思わないか?」

一樹がいきなり話題を振ってきた。

「まあ、そうかもね。」

私は曖昧にして答える。

「まあ、話を戻して、なんで経済分析専門のうちでこの問題に興味があるのだろう?」

「うー樹に私は自分のバッグから一枚の紙を取り出し、差し出した。それを軽く読み一樹は内容が理解したようだ。

「なるほど。これは経済問題だわな。」

「そう言つこと。だから虎ノ門と海軍省に関心が行くわけ。」

後々考へると、この段階で事態の全容をおぼろげながら把握していたのは私たちだけだったと思つ。

「5月21日 東京都千代田区 警視庁本庁舎 10:00

「怪盗ラファエル特別捜査本部」が設置されてから早一週間か・・・
そう思いながら、書類を整理していくと部下の担当官が声をかけてきた。

「管理官、この書類をどこに置きましたか?」

「その書類はあの棚に仕舞つて。」

そう指示をして、私はコーヒーを口に含んだ。苦い。豆の苦みが出

すぎている。私、警視庁刑事部本庁捜査一課管理官、高宮由子は「

コーヒーを持つて立ち上がり、窓の外を見た。皇居が見える。

「管理官。今日は神奈川県警の派遣部隊が着任します。」

「昨日は千葉、今日は神奈川、明日が埼玉ですね。」

部下の報告に私は確認をする。

「はい。しかし、どの県警も刑事部のエリートを送りこんできましたね。想像どおりですが。」

「部長の言葉にもあつたでしょう。我々はオール警察軍でこの事態に当たらねばなりません。所轄・本庁・他県警の垣根を超えないとい我々はやつを捕まえられないのです。」

「そう言つていてどうアが開いたようだ。」

「管理官、神奈川県警の方が来ました。」

「そう言つて、係の者がやつってきた。」

「通してください。」

「そう言つてその人間を下がらせた。しばらくすると再びドアが開いた。」

「高宮警視はおられますか？」

「私が高宮です。」

私は、自分から名乗り出ることにした。横浜でも本件、事態が発生しているため神奈川県警の協力は不可欠だ。

「自分は、神奈川県警より派遣されました小酒部であります。」

「そう言つて、小酒部氏は敬礼した。自分も返礼する。」

「小酒部さん、お名前は何回か聞いたことがあります。うちの内海と何回か一緒に仕事をしたとか?まあ、かけてください。」

「そう言つて私は小酒部氏に席を勧めた。」

「すみません。」

「そつ言つて座る小酒部氏。」

「何か飲みますか?あいにくコーヒーは豆が古いせいか少々苦いで

すが・・

そう言つて笑いながら飲み物を進める私。

「そうですね。私は紅茶党なので、出来れば紅茶を・・・」

「分かりました。誰か、私と小酒部さんに紅茶を!」

そう言つて係の者にオーダーする。

「神奈川県警から何名出向になつたのですか?一応確認です。」

「各県警から4名。警視庁から専属班で7名の計23名だと聞いてあります。」

「それに私と千葉さんが加わり、計25名で捜査をします。最も、いざ状況が発生したら、各所轄から動員をかける予定ではあります。が・・・」

係の者が来て、2つの紅茶を私たちに渡した。

「どうもありがとうございます。だいぶ警視庁も叩かれているようですね。」

そう言つて小酒部君はスポーツ新聞を取りだした。

「まあ、ここの様ではしょうがないですよ。こっちの裏をかいてやつはやつてきます。それをどうするかを考えねばなりません。」

「しかし、どうやってやつは情報を収集するのでしょうか?それが疑問なのです。」

「そうなのです。我々へは警視庁の問い合わせメールに送りつけるのに、そもそもなぜその所へ盗みに入るのか?その情報をどう収集するのか?それが疑問なのです。それが分かれば、後を追えるのでしょうが・・・」

そう言つて私は唸つた。そう、この怪盗ラファエル事案の最大の困難は「足跡」が全くないこと。指紋・声紋はおろか靴の足跡すらない。しかも、盗みに入る場所の情報をどう收拾するのかさえも現段階では不明。鑑識もお手上げと来ている。

「科警研は何と言つてているのですか?」

「同じことです。声紋を何回か収集したのですが、そのたびに違う結果が出ておりまして、複数犯説を唱える者もいるほどです。」

「監視カメラは？」

「通常のカメラに加えて赤外線感知カメラも使用しましたが、映つていないので。肉眼では皆見えているのに、ですよ。もうここまで来ると本当に天使がいるのではないかと思うほどです。」
「そう言つて私はため息をついた。

「天使、ですか・・・ラファエルとは確か、「癒し」の意味でしたね？」

「だと聞いています。私もそれほど詳しいわけではありませんが・・・」

「天使、か・・・なんという皮肉だらう。」

「いざれにしても、これから私たちはあなたの指揮下に入ります。よろしくお願ひします。」

そう言つて小酒部君は私に手を差し出した。

「宜しく。」

そう言つて、私たちは握手をした。

某所 11：00

「なるほど、明日で刑事部は陣容が整つ訳ですな。」
電話口から声が聞こえてきた。

「そうなります。警察はこれで陣容が整いました。」

「あなたのことだ。すでに手のものを送り込んでいるのでしょうか？」

「その点は抜かりなく。」

「さすが、力ミソリと異名をとるあなただ。手が早い。」「駒をここで欠けさせるわけにはいきませんよ。」

そう言つて私は笑う。

「そう言えば、あなたのご友人が4月の人事で刑事部に異動になつたそうですね。」

「彼女のことか。」

「ええ。ただ捜査一課関係らしいですよ。この件には無関係ですな。」

「なるほど。では、今日の夕刻にいつもの方法で連絡を行つといふこと

ことよりよいでしょうか?」

「来月の送金、どうします?」

「いつもの通りに行いましょう。手はずは整っています。」

「やはりこの件に関してはあなたの方のほうが専門家だ。」

私は苦笑して返した。

「では、宜しくお願ひします。」

そう言つて私は電話を切り、自分のPCに向かつた。

「件名：下記依頼の件に関する。」

「先日来お願いしております件に関する」私はメールを書き始めた。

1・2 そして役者はそろつた。

2002年5月21日 東京都中野区聖ポール学院礼拝堂内 1
7:00 視点：沙耶

私はノートPCの画面を開き、メールボックスをチェックした。やつぱり、あつた。

4騎士からの依頼状。ここ最近相次ぐ解決要請の依頼だ。その4騎士が何者なのか、私は知らない。

怪盗ラファエルがこれまで行つた依頼は12件に及ぶ。最初はこの礼拝堂に来る人の悩みを聞いていたのだが、3月ぐらいからこの4騎士の依頼が多くなってきた。4騎士、麻耶の話では「ヨハネの黙示録」に登場する滅びの騎士らしい。そんな悪趣味な差出人はどこのどいつなのだろう？そんなことを考えながらメールを呼んでいると、麻耶が口を開いた。

「この4騎士って、きっと白馬に乗った王子様みたいなものなのじやないかな？」

私は、飲んでいた「コーヒーを噴出した。幸い、誰も正面に座っていない。

「ちょ、ちょっと沙耶汚いよ…」
遙が抗議の声を上げる。

「あのね、この4騎士は聖書のヨハネの黙示録の4騎士じゃないかって考えているの、わたしは！なんで疫病とか飢餓を司る騎士が白馬に乗つて御姫様を迎える騎士と一緒になるの…？」

「だって、騎士といえば白馬。白馬に乗った王子様じゃない！」

時たま麻耶の考えが分からなくなる。この3人の中では遙はまだましだ。麻耶は時たま、あほの子じやないかつて思うことがある・・・。
「で、話を戻すと今回の依頼はこのサファイアの奪還なわけだね。遙、ナイスタイミング。私は話を戻すこととした。

「今回の依頼は、商事代表取締役・小田修誠氏の自宅からの奪

取。この代物は、バブル崩壊前に地上げで買収した家から不當に持つていつたものらしいよ。なんでも、家と土地の所有権がすでに小田の会社にわたつていることを口実に返還に応じないらしいの。で、民事で争つて訴えたほうの敗訴。

「なんで？」

麻耶が聞いてきた。

「やっぱり所有権は小田側に渡つていたらしい。ただ、小田の会社の財務内容がバブル崩壊後急速に悪化したらしくて、この宝石を海外特に中東の石油成金に販売するらしいよ。明日の夜、成田発チャイナエアで香港に出国するのだつて。」

「じゃあ、今日の夜しかチャンスはないわね。いつも通り、警視庁のメールアドレスにメールして。あたしの活躍をアピールするのよ！――」

始まつた・・・なんでそんなリスクを冒すかなあ……と私は思つ。スパツとやつてスパツと帰つてくれればいいのに・・・そこそこ。麻耶。あんまり遙をおだてるのじやない。あんまりおだてるとすぐに遙は調子に乗るのだから・・・そう思つて、私はメールの文面を作成した。

東京都千代田区霞が関 警視庁本庁舎 同時刻 視点：由子

「管理官！たつた今、ラファエルからの予告状がメールに受信されたとの連絡が総務課よりありました。すぐに転送するそうです。ついに来たか！私はそう思つた。胸の高鳴りを感じる。私にとつて、ラファエル事件は單なる事件じやない。頭脳と頭脳の戦いだ。いうなれば、チエスのゲームに似ている。

「高富管理官。管理官！――」

「え！？」

「どうかされましたか？少し変な表情をされていたので・・・」
「どうも表情が顔に出てしまつたらしい。部下が心配して話しかけてきた。

「有難う。なんでもないわ。それより、理事官に連絡して、捜査本部の立ち上げ準備を！」

「メールが来ました！」

捜査本部全体のマイクシステムがオンになつた。担当の読み上げる声が聞こえる。

「予告状。F r o m 怪盗ラファエル t o 警視庁の皆さま。CC 商事代表取締役・小田修誠様。今夜19時。中野区 商事社長室よりサファイアを頂きます。b y ラファエル。とのことです。」 その報告が終わり、一瞬の静寂の後捜査本部は騒がしくなつた。

「中野署に現地対策本部を設置！」

「内海班は中野へ急行。所轄も動員して 商事周辺の警戒に当たれ！」

ゲームの始まりだよ。ラファエル。今度こそ、私は君を逃しはしない。そう思っていたところ、対策本部のドアが開き、千葉理事官が入ってきた。千葉さんは周りの邪魔にならないように注意をして、私のほうに歩いてきた。

「準備は進んでるよね。」

「まあ、ですね。今回は中野ということで、車両はあまり使えないでしょ。自転車を中心の警備になると思います。」

「拳銃携帯許可、申請する？」

「いや、止めておきましょう。今回発砲したら民間人を巻き込みかねません。」

本当は催涙ガスぐらいほしいのだが・・・

「さつき部長に話をしてきたわよ。部長からの言葉。しつかりやれ、だつて。」

そう言って千葉さんは笑つた。

「最善は勿べします。いま、17時半ですよね。間に合つかな・・・

・

そう言って私は時計を見た。ラファエルのやつ、時間がないぞ。

「理事官。内海班はすでに出動しました。直接 商事入りすると

のことです。」

「了解しました。商事と連絡は付いたのー?」

「連絡がつきました。警備許可、出ています。」

「つかサイドは問題ないか・・・後は、これを指示するだけだ。」

「今回の対策本部は時間がない為、ここに設置します。」

「このゲーム、多分我々の負けだな。時間がない。」

東京都中野区中野ブロードウェイ 18:00 視点：雄彦
たまには中野もいいものだ。アキバはないものがある。そう史彦
とブロードウェイ前のマクドナルドでコーラを飲みながらそんな話
になった。まあ、確かにそうだ。

「で、どうなの？今朝の話なのだけど。」

そう言って史彦は今朝の話を再び振った。幕度の店内は僕たちと同じ中高生でにぎわっている。まあ、ファーストフード店なんてこんな感じなのだろう。どこでも。

「ラファエルの件？」

「そうそう。」

「この間、知り合いの人とその話をしてね。彼曰く、義賊であれ強盗であれ人のものを盗むという行為と人の住居に不法に侵入するという行為には変わりはない。よって、いくら奴に正義があろうとも、法の下の正義はない。と言っていたよ。」 そう言ってジンジャーールを飲んだ。史彦の顔が笑った。

「多分そうなのだろうね。盗む奴、盗まれるやつ、奪われた奴。それぞれに正義があるということなのだろうな。最も、僕は盗む奴を応援するけどね。」

「なんで？」

僕は首をかしげた。

「いいかい。ラファエル事案に関してはきっと何か裏がある。僕はお前さんが知っているように陰謀論者じゃないけど、この件に関しては陰謀があるような気がする。まず、なんでこんなに正確に場所

が特定できるのだろう?」

確かにそうだ。それは当然の疑問としてある。どこかに内通者がいるのかそれとも・・・

「そして、そこにはおそらく権力の香りがする。権力にはしがみつくものなのだよ。」

そう言って史彦は大笑いした。私は苦笑した。こいつは昔からそうだ。

「権力は有効に生かすべきものだ。その中にいれば、情報を自然と入手できる。後はその情報を如何に分析するか。それが問題なのだ。」

史彦とは初等部以来の付き合いになるが、僕らはよほど気が合ひつい。よくつるんで話をしている。まあ、こんなよつな話だが・・・

その時、けたたましいパトカーの音が何台も聞こえてきた。

「今日はここがショーの舞台らしいな。ラファエルさんよ。」

東京都千代田区霞が関警視庁内ラファエル捜査本部 同時刻 視点：由子

「管理官、あと1時間です。」

スタッフの呼ぶ声が聞こえてきた。壁にかかっている時計を見ると18時。予告の時間まで、後1時間だ。

「内海警部他捜査班、現場に着きました。配置につきます。」「中野署から応援部隊、現着。配置につきます。」

駒の配置は終わった。問題は、その駒をどう動かすかだ。私は机に向い、PCを立ち上げた。ウィンドウズの表示が出たところで、自分の内線電話が鳴った。私は、それに手を伸ばした。

「管理官、南雲参事官よりお電話です。つなぎます。」「お願いします。」

そう言つと、しばらくのちに南雲さんのいつでも冷静な声が受話器を通じて聞こえてきた。

「ああ、由子ちゃん。私です。南雲です。」

この人は人前では私のことを、高富さんと呼んでいる。大学の先輩に当たるのだが、どうも私は「」の人は苦手だ。嫌いではないのだが・・・

「南雲さん。どうかしたのですか？いま、ラファエル事案の対処で忙しいのですが・・・」

「その件なのだけどね、うちのほうでも関心があるのよ。小田つて男、どうも不動産投資のほかに、ある一件に絡んでいらっしゃいのよ。」

なるほど、小田の件ですか・・・

確かに、ラファエル事件はその事案のみよりも事案終了後の後始末が忙しくなることが多い。この調子でいくと、外為法か何かの違反だろ？でも捜査一課を主にみている南雲さんが、いつたい何なのだろう・・・

「これはある筋から聞いた話なのだけど。」

そう言って南雲さんは話し始めた。なるほど、後藤さんがらみか。南雲さんがある筋と言つて話を始めるのは、大抵後藤さんがらみの事案の件だ。

「小田、バブル期に関東のあちこちでレジャー開発を行つていたらしいのよね。で、その中の数か所がある宗教団体にバブル後に買いたたかれたという話を公安が持つていてね。まあ、95年のようなことにはならないとは考えているしそうするつもりだけれども、どうも気になつてね・・・情報提供よ。」

私は南雲さんにお礼を言い、電話を切つた。そして、その内容を千葉さんに報告した。千葉さん葉さん、私と警視庁の中でもまだまだ数の少ない女性の担当官だ。そして、南雲さんはその先輩に当たる。そう言つこともあつて、私たちはよく情報を交換し合つてゐる。千葉さんはその報告を聞いて、顔をしかめた。

「これは検察庁あたりが動いているかもしれないわね・・・」

「はい。これまでの事案を考えると、検察庁の内定がほぼ終わって

いるかもしれません。」

「にしても、宗教団体とはねえ・・・」

「念のため、社内にも配置しておりますので対処は可能です。」

そう言つて私は時計を見た。残り、後30分。会議室内はP.Cの音や通信機から流れてくる捜査員の話声等でますますうるさくなつていつたが、私たちの周りだけ音の無い世界のようだつた。

東京都中野区聖ポール学院礼拝堂内 18:30 視点：遙

「それじゃあ、行つて来るね。」

私はそう言つて、礼拝堂の椅子から立ち上がつた。テーブルの上にはそれまで飲んでいた缶入り紅茶が置いてある。それを沙耶が取つた。

「駄目だよ。ごみはきちんと捨てなきゃ。」

そう言つて、自分の持つている「ミニ袋に缶を入れる沙耶。知つている？沙耶。あたしはそう言つあなたの几帳面な性格が好きなの。無論、LoveじゃなくてLikeよ。あたしには百合つ氣はないわ。あたしは、礼拝堂中央にある十字架の前までやつてくると跪いて、胸のブローチを両手で持つた。

「契約、発動！」

そう言つと、あたしの体のあちこちが少し大きくなつた。でも、髪は変わらずにボーテールになつてゐる。あちこち変わつたことで、スタイルもよくなつた。このまま外に出ればきっとスカウトされるねつて、沙耶に行つたら怒られたつけ・・・

眩しい光とともに服も体に密着した黒のスーツに変わり、胸と胸との間に二つの光源が加わる。一つは残りのシンクロエネルギーを、もう一つはあたしの生命エネルギーを示してゐるものらしい。なんでもラファエルが契約時に言つには、シンクロエネルギーはあたしの残りの魔法使用可能エネルギーを示してゐるらしい。契約を解除しないで、シンクロエネルギーが尽きたときは、素つ裸になつてしまふらしい。それは嫌だ。で、生命エネルギーは文字通りあたしの

残りの生命エネルギーを示している。そのどちらもがなくなつた時、あたしは死ぬことだ。

「なんでやねん！なんでそんな某M87星雲から来た光の巨人みたいになるんや！」

となぜか関西弁で突つ込んでいた。あたしがよくボケているとあなたは言うけど、沙耶の突つ込みも時々飛んでいるとあたしは思うよ、沙耶。で、麻耶。あなたそんなきらきらした目であたしを見ないで頂戴・・・なんだか恥ずかしくなつてしまふから。

契約発動という名の変身が終わつた。特撮番組ならここであたしは名乗りを入れるべきなのだろうけど、あたしはしない。最初はしようと思ったのだけど・・・

「ダメダメダメ！なんで名乗りなんてするのーそんなのみすみす自分の情報を教えるようなものじゃない！」

そう言ってやっぱり沙耶が反対した。まあ、沙耶があんまり強硬に反対するのでやめたのだけど、その代わりに予告状とあたしの契約後の姿を決めさせてもらつた。

「エンシェル・シャイン、行つてきます。」

「行つてらっしゃい。いつも通り、私たちはここで待つていてるね。」

そう言って手を振つて送り出してくれる沙耶。

「氣をつけてね。天使ラファエルの加護があらんことを」

そう言って送つてくれる麻耶。あたしにはこの2人がいてくれる。だから、いつでもあたしは前向きに全力全開でがんばれるのだ。

東京都新宿区JR市ヶ谷駅前 グランドビル市ヶ谷 同時刻 視点：絵里

私は市ヶ谷駅前にあるホテル、グランドビル市ヶ谷のティールームである人物を待つていた。市ヶ谷駅前という立地上、ところどころ自衛隊の制服を着た人にあつ。制服萌えではないが、私は制服が好きだ。いま、待つている人間もどちらかといつと制服が似合う人だ。

「お待たせしました。」

キッシンジャーの「回復された世界平和」を原著で読んでいた私に声をかける人物がいた。待っていた男性だ。

「いいえ。お久しぶりです。大島さん。昨年はワシントンでお世話になりました。」

「いいえ、こちらこそ。ペントAGONの見学ぐらいしかできませんでしたがいかがでしたか？」

そう言う大島さんに私は満面の笑みを浮かべて言った。

「なかなか国防総省を見学できるものではないですね。」

最もあの後、ニューヨークに移動して私は地獄を見た。

「私でペントAGONの見学も最後ですか・・・」

そう言って私はボーアに声をかけて、コーヒーの新規の注文とお代わりを注文した。

「で、御用件は？」

私は大島さんに尋ねた。昨日、大島さんから私の携帯に連絡があったのだ。父の知り合いでもある彼の要請をむげにはできない。

「絵里ちゃん、これは極秘の部類に入るのだけど・・・」

そう言って、大島さんは話を始めた。とりあえず、私の情報保持ランクで問題ない部類の話をするらしい。

「上からの指示で、ラファエルの調査をすることになったよ。」

「ふーん。」

私はそつけない態度をあえてとった。そして、頭の中で考える。国内の犯罪案件にしか過ぎないラファエルの案件を市ヶ谷が調査することはこれ、如何に・・・

「絵里ちゃんの力を借りられないかつてね。そう思つて連絡したのだ。」

そう言って、やってきたコーヒーを飲む大島さん。

「とりあえずは遠慮します。大学も始まつたばかりですし、何せ非常勤勤務も忙しいので・・・」

「そつか。じゃあ、気が向いたら教えてよ。」

そういうて、話を昨年のワシントンでの思い出話をする私たち。でも、私は考えている。何は市ヶ谷が興味を示すのだ……？

東京都中野区JR中野駅前 19:00 視点・遙

「フライ・エンド！」

あたしはそう唱え、背中から生えている羽を消した。もちろん、椎名遙に羽は生えていない。エンシェル・シャインになつて、「フライ」の魔法を使うときにだけ生えて空を飛ぶことが出来る。1月に契約できるようになつて一ヶ月、あたしは魔法の練習をして、マスターすることが出来た。沙耶からはよく、「あなたは意志が強いよね。どんなことでもくじけないよ。すごい。」

とほめられる。それはそれですごく嬉しい。でも、一番うれしいのは、「遙って、すごくかっこいい。前向きで、諦めないでなんでもするじゃない。」という麻耶の言葉。

でも、あたしは知っている。沙耶も麻耶も負けず嫌いで諦めが悪い。あたしと一緒に、だから、あたしはやる。やって見せる。

明るい中野の街の中にあって、商事が入居しているビルの屋上は暗い。あたしはそこに降りると、素早く「サイレント・エンド・シャドウ！」と唱え、ビル内に入る。これであたしの姿も音も警察に察知されることはない。何もわからない警備の警官のわきを抜け、あたしは社長室の前に来た。声が聞こえる。

「小田社長、貴方にはお世話になりました。」
女性の声だ。

「大尉、これは一体どうしたことですか？」

脅えたような男性の声が聞こえる。おそらく小田の声だろう。

「小田さん、バブル以来貴方にはお世話になりました。でも、貴方にもう用はないのです。ここで、消えてください。」

「断る！」

小田の大きな声がした。警察はどうしているのだろうか。気付かないのだろうか？

「そうですか・・・あなたが明日の夜、香港に出国すると聞きましたので、せっかくですので足を延ばしてペナンかどこかでしばらくいていただこうと思ったのですが・・・残念です。」

「ちょ、ちょっと待つてくれ！」

そう言つて社長室のドアが開いた。チャンス、とあたしは考えてまんまと社長室に侵入した。入れ替わりに小田がほうほうの体で出てきた。どうやらトイレに駆け込むみたいだ。

社長室の応接のテーブルの上に、田当でのサファイアがあつた。そして、あたしは周囲に気を配る。そのテーブルの向かいにあるソファに、女性が一人座っていた。ビジネススタイルの、きれいな女性だ。サファイアのわきには、航空券らしきものが見える。さつきの話の件のものだろう。大尉と呼ばれたその女性は、あたしに気付いていない。そりやそうだ。胸の光源を見る。まだ、シンクロエネルギーはたつぱりある。そんなことを考えていると、小田が応接室に戻ってきた。

「考えはまとまりましたかな？」

「はい。私はあなた方には屈しませんよ。絶対に。」 そう小田が言いきつた。

「そうですか。それは残念です。」 そ

う言つて、大尉はスーツの内ポケットからピストルを取り出し、小田の額に当てた。

「さようなら。小田さん。」

銃声が部屋に響いた。

東京都千代田区霞が関警視庁本庁舎 19：30 視点・百兩

「緊急、緊急。 商事本社ビルで銃声！」

その声に、ラファエル対策本部は恐慌状態になつた。今回の件はしぐつた。まず、本社ビルの中での警備が断られた。あくまで、我々は捜査をする側で、被害者になる方に協力を要請することしかで

きない。つまり、立ち入りを断られたらそれまでなのだ。

「理事官、一課に連絡してください。」

そうだった。私は慌てて捜査一課直通ダイヤルを回し、応援を要請する。しかし、なぜ今回発砲になつたのだ？私は、状況を整理しようと努め、情報をもつと出すように指示を出した。

東京都中野区 商事本社 同時刻 視点：遙

いま起こつたことが信じられない。状況を整理すると、大尉と呼ばれる女性が銃口を小田に向け、発射した。その結果は・・・あたしはショックのあまり言葉が出なかつた。でも、次の瞬間には正気に戻つたあたしは、サファイアに目を向けた。

「いるんでしょう？ エンジエル。」

冷たい、感情の無い声がした。

「よくわかつたわね。」

あたしはサイレントとシャドウを解除し、人殺しに向かい合つた。「どうもはじめまして。ラファエルさん。こんな形で会うとは思わなかつたわ。」

「そうでしょうね。あたしもこんな形で会いたくはなかつたです。」

「あなたの目的はそこにあるサファイアなんでしょう？」

あたしは無言で答える。

「いまはあなたと会う必要はないようね。」

「どういうことですか？」

あたしは身構えていた。

「そう言つことよ。」

そう言つと大尉は窓を破つて外に飛び出した。ここはビルの5階、普通の人間なら助かるはずはない。慌てて、窓の外から見たものは、あたしが契約したような形で背中から羽の生え、空を飛ぶ女性の姿だつた・・・

あの後、あたしはサファイアを持つて再びサイレントとシャドウをかけると、室内に突入した警官と入れ違いに正面からビルの外に出た。周囲はすでに多くのパートカーがいた。

「なんなのよ、あれは・・・」

幸い、まだシンクロ工ネルギーはある。あたしはビルから少し離れたところで魔法を解除した。契約後の、すこし大人びた姿のあたしは中野の街を歩く。やっぱり、警官が多い。

同所 同時刻 視点：雄彦

警察車両の音がうるさい。上空にヘリが飛んでいるようだ。史彦と二人で中野駅の南口の商店街を歩いていた。どうも尋常ならざる警察官の数だ。

「何かあつたのですか？」

僕は近くにいた警察官に尋ねた。

「この近くのビルでラファエルが現れました。そして、殺人事件が起きました。」

「有難うございます。」

そう言つて僕たちはその警官から離れた。数メートル歩くと、僕は何かの違和感に苛まれた。

「なあ、さつきの警官、やけに状況に詳しくなかつたか？」

「僕もそう思う。サイレンの音が鳴りだしてからの時間を考慮する」と、そこまで知つてゐる警官がいるのだろうか？

そう言つて振り返る僕らの視線の先には・・・さつきの警官はいかつた。その代わりに、女子大生ぐらいだろうか？髪は黒のポニーテールで、ビジネススタイルで、それでいてミニスカートをはいた女性が僕の視線に映つた。直感だつたのだろう、僕は叫んだ。

「怪盗ラファエルだ！史彦、警官を呼んでくれ！？」

僕は、ラファエルを見た初の人間になつた。

はい、どうも。

みなさんはじめまして。腹黒伯爵と申します。
このたびは、自分の処女作、「怪盗ラファエルを捕まえるー」をご
覧いただきありがとうございます。

小生、いまだ未熟者にて、文法・誤字脱字が多く思います。
そんな時には感想欄で教えていただけると助かります。

また、感想などもお待ちしております。

皆様の応援、よろしくお願ひいたします。

筆者・拝

次回予告

第2話「そして役者は演目を始める。」

怪盗ラファエル発の目撃者として強引に警視庁の嘱託にさせられた
雄彦。史彦の補佐とラファエル捜査本部の温かい支援を得ることに
成功する。

その裏では、尊敬する2人の裏工作があつた。

ラファエル捜査本部と雄彦、史彦は一計を案じ、浜松町の放送局で
宣言する。

「怪盗ラファエルに告ぐ。予告状はこの私に直接出すよつて。」

そして出される予告状。練馬区を舞台に、今演目の幕が開くーー！

2・1 そして役者は演目を始め。 (前書き)

ええっと・・・

これから話の中で、実際に起った事件・事故が出てくることがあります。また、それを引用することがあります。

それはあくまでフィクションの中での話であり、その関係者の方々を不快にさせるものではありません。

不快になられた場合はご連絡いただけますようお願いいたします。

著者・拝

2・1 そして役者は演目を始める。

2002年5月24日 東京都千代田区霞が関 警視庁本庁舎
17:00 視点：雄彦

どうしてこうなったのだろうか？僕は自問した。目の前には、警視庁幹部の何人かが座っている。で、僕の後ろには御手洗が座っている。何かの尋問だろうか？

「浅海雄彦君だね？私は警視庁の黒崎だ。刑事部長を務めている。」

「千葉です。警視庁刑事部の理事官です。」

「浅海です。はじめまして。」

警視庁の刑事部長か・・・そんなお偉方がぼくに何の用事だ？

「報告によると、君は変装していた怪盗ラファエルの姿を見破ったと聞く。実はうちの捜査員は誰もまだ見破ったことがないのだよ。なぜ君は見破れたのかね？」

そんなこと聞かれて困る。正直な話。

2002年5月21日 東京都中野区JR中野駅前 18:50
視点：遙

「待て！あいつが怪盗ラファエルだ！」

そう叫ぶ声が聞こえた。あたしは動搖してその場から走り出した。契約発動時、あたしの五感は研ぎ澄まされる。最も、視力はよくなるわけじゃないからメガネをかけているのだけど・・・そのメガネの先がある人物を捕らえた。そうじゃなきやあたしはその場にどどまつていただろう。その人物は、沙耶の兄、雄彦さんだ。あたしもよく沙耶の家に遊びに行くから会つていい。「まかせる自信はない。」「あいつがラファエルです！」

同じタイミングで似たような声が聞こえる。こつちは御手洗さんだろう。御手洗さん、雄彦さんと同じクラスの友人で、沙耶の家でよ

く会つ。」の一人ならあたしのことをすぐに見抜いてしまうだろう。あたしは沙耶と麻耶の待つところへ戻るべくノイズの魔法を使い、騒音を出して混乱させる作戦に出た。

2002年5月24日 東京都千代田区霞が関 警視庁本庁舎

17:00 視点：雄彦

「とまあ、そこで口ストしたわけです。」

僕の説明に黒崎さんは納得したようなしないような複雑な表情を浮かべていた。そりゃそうだろう。一介の高校生がいま巷を騒がしている怪盗の正体、しかもこれまで警察は誰も見ていない！ものを見ましたっていうのだから、納得するほうが不思議だ。でも、あの後史彦と話をした際に当然話した。

「なんで僕らだけラファエルだとすぐに気付いたのだろうか？」

これまでラファエル事案が発生すること10数回、警察はそのたびに超高感度カメラやら赤外線追尾カメラやら暗視装置やら果てはNシステムで使うカメラまで持ち出してきたといふのに、姿を見たことがないといふ。ラファエルは文字通り天使なのだという警察官までいる始末らしい。

僕は隣に座っている千葉理事官の顔を見た。困惑している。この事態に、だろうか？ それとも一介の男子高校生2名を放課後の学校から任意同行同然でしょっぴいてきたことに、だろうか？

視点：百兩

正直なところ、私は困惑している。一介の男子高校生をこの事案に巻き込むことに関してだ。それは今日の午前中のことだった。私は、黒崎部長に呼ばれて部長室を訪れた。

「千葉です。入ります。」

部屋に入ると部長は私に応接のソファに座るように指示をした。

「早速だが用件を話そう。先のラファエルの案件の際、ラファエルの正体に気付いた高校生がいたそうだね？」

「はい。そう言う報告が上がってきております。」

「先ほど総監と都公安委員会委員長と話をしたのだが、彼をうちの嘱託として招こうと考えている。何を言ったのだ？部長は？高校生を嘱託として招く？」

「部長。前例がありません。しかも嘱託で高校生を？」

「やむをえぬ処置だ。」

そう言う黒崎さんは笑っている。このおっさん、状況を楽しんでいやがる。私は内心、この部長を馬鹿にした。

「部長のご指示であればやむをえません。」

そう言って、妥協せざるを得なかつた。少年、申し訳ない。君を警察に招くことになりそうだ・・・

2002年5月25日 東京都武蔵野市吉祥寺 13:00 視

点：一樹

その日は土曜日だった。大学の講義もなく、非常勤で勤務している会社の仕事もない僕と絵里は自宅に知り合いの中高生を招いて昼食を一緒にすることにした。僕の家、より正確に言うのであれば久瀬家の家は閑静な東京の住宅地、武蔵野市の吉祥寺にある。絵里の母校リリアン女学園までバスで一本、大学までは自転車ですぐのところに家はある。昼食はパスタにすることにした僕以外はほとんど女性とは言え、その食欲たるやすごいものがある。

とはいっても、調理をするのは絵里にお任せして、僕はペリエを飲みながらサラダの準備をしていた。ちなみに久瀬の両親はいま中国に行っている。なんでも、中国市場の情勢調査らしい。中国ねえ・・・

「ほらほら、中国市場の動向を考えている暇があるのでしたら手を動かして準備をして！」絵里に怒鳴られた。その時、チャイムが鳴る音がした。パスタのゆで時間を計算している絵里の代わりに、僕が出る。おいおい、これじゃあ新婚家庭みたいだな。そんなことを

考えていたと箸が飛んできた。

「ちょっとー。新婚家庭って何よー？」

「はいはい。」この関係は円熟期の家庭ですよね。そう言って受話器をとる。

「遅れてしません。早乙女です。」

一番乗りは早乙女さんとの二人か・・・あそここの家は揃いもそろつて優等生、委員長タイプの姉妹だからこうこうときには来るのが早い。ロジクを解除して、玄関で出迎える僕。

「いらっしゃい。彩里さん、綾奈さん。」

「本日はお招き有難うございます。これ、つまらないものですがどうぞ。」

そう言って高野のケーキを差し出す彩里さん。彩里さんが高校三年生で綾奈さんが高校一年生。まあ、オガサワラの関係もあり、軽井沢で最初に会ったのを契機にぼくも親しくしている。いろいろ思うところ、考えることがあるらしい。軽井沢後は絵里を彩里さんは崇拜しているようだ。妹の綾奈さんも絵里を崇拜している。おいおい、うちの絵里ちゃんは偶像崇拜の対象じゃないのだよ・・・ダイニングに案内し、一人にお茶を進めていると再び呼び鈴が鳴った。再び受話器をとる僕。

「どうもおー成瀬です!」

賑やかな、もとい。とんでもなくうるさい三姉妹の声がした。成瀬姉妹は三人姉妹。姉の歩さんが絵里の一つ下。次女の美穂さんが今年高一で末っ子の美亜さんが中一。まあ、元気のいい姉妹ですわな。元気が良すぎて困ってしまう。特に美穂・美亜の姉妹はまあ、うるさい。そんなかしましい三姉妹をダイニングに案内する。先に来ていた早乙女姉妹とハイタッチをする三人。まあ、歩さんと彩里さんは生徒会で先輩後輩の間柄で、今もこつやつてうちでよく合っている。うんうん。いつ見てもかしましい光景だ。そんなことを思つて

いたら今度はフォークが飛んできた。絵里さんや絵里さんや、非常に危ないのじゃないですか・・・

そんなぼくに天使が降りてきたらしい。呼び鈴が鳴つて、僕は走つて受話器をとる。

「どうも、一樹さん。浅海・椎名家です。」

来た来た。今日の主役が。おとといの夜、絵里の形態に虎ノ門さんから電話がかかつてきた。なんでも、浅海雄彦という男子高校生の情報がほしいとか・・・まあその話は食後にしよう。僕は3人を出迎えるべく玄関に向かつた。後もう2組来るのだが、その中でもぼくは雄彦が一番気に入っている。雄彦は僕に似ている。そんな気がする。

1999年7月末 長野県軽井沢町 西園寺家別荘 18:00

視点：一樹

新潟からぼくを呼んだのはこの為だったのか・・・内心、うんざりした。

去年の秋、僕はある人から連絡をもらつて新潟駅で待ち合わせをした。新潟出身で、高校卒業・浪人卒業まで僕はそこで暮らしていた。あるとき、同じ年ぐらいの女性から電話があつた。その人は久瀬絵里という女性だった。新潟駅の改札で待ち合わせとのことで、僕は待つていた。正直、すぐに見つかるとは思つていなかつた。でも、絵里さんはすぐに僕のことが分かつたらしい。駆け寄ってきて、そして泣いた。人目をばかうず号泣するので、ぼくは取り敢えず駅南のベンチに移動して座つた。

「ごめんね、ごめんね・・・」

何がごめんね、何だらうか？当時のぼくには無論知る筈がない。少し絵里さんは落ち着くと、初めてにしては道を知つて足取りで駅前に移動し、有名な蕎麦屋に入り昼食をとつた。その後、絵里さんたつての希望で日本海が見える喫茶店までタクシーで移動し、入

つた。この店は父の知り合いで経営しているところだ。なぜ東京に住んでいると聞いている絵里さんがこんな喫茶店を知っているのだろう？

「変わらないね・・・」

一言、絵里さんが呟いた。

「これから言う話、信じてください。」

向かい合って座る僕の前で、絵里さんは深々と頭を下げた。そして、話し始めた。なんでも、絵里さんには前世の記憶があり、新潟で生活していたこと。今から8年後、ベトナムに赴任中に交通事故で死んだこと。そして、前世が「柊一馬」つまり僕だったことを話した。正直、席を立とうと思つた。だが、絵里さんの次の発言にぼくはその考えを取りやめた。

「一番の友人の名前は　。いまでも丸々さんの方が好きなのでしょう？」

当たりだ・・・ぼくのことを罵にかけたとは思わない。彼女の言ったことは本当なのだろう。僕は直感した。でも・・・

「でも、安心して。私はあなたの人生に介入する気はないわ。もう、柊一馬の人生は終わつて久瀬絵里の人生があるのだもの。ごめんなさいね。新幹線の中で、ずっとそう考えていたのだけれど、いざ会うと・・・」

絵里さんの目に再び大粒の涙が出てきた。まずい、まずいぞ。いくら相手がぼくでもこれは反則じゃないか？

「これから、私たち友達になれるかしら？」

そう言つて手を差し出す絵里さん。僕は、その手をつかんでこつた。

「もちろんです！」

それから連休・冬休み・春休みと一緒に絵里さんと過ごした。まあ、高校生の健全なお付き合いだったということにしようつげフングフン。

高校2年の夏休み、僕は絵里に誘われて、軽井沢で過ごしていた。

読みたい本は絵里に頼めば買っておいてもらえる。久瀬家の別荘で、僕と絵里は怠惰な読書三昧をしていた。その時、チャイムの音がした。絵里もぼくも半袖短パンという非常にラフな格好だったので、来客はまずいと考えて別荘の人に対応をお願いした。久瀬の二両親とはもうすっかり顔見知りで、僕のことを絵里の将来の旦那と考えているらしい。自分が、自分の旦那になる・・・想像しがたい光景だ。

別荘の人に呼ばれ、戻ってきた絵里の手には何かはがきがあった。
「ああ、西園寺のおばあさんの誕生会をやるのだったわね・・・一
樹、一緒に行かない?」

そう言つことでぼくはいま、こうして行きたくもない、見ず知らずのどこのかの金持ちのババアのパーティーにいるのだった・・・

ゴリちゃんの「マリア様の心」のおかげで場が盛り上がった。僕はグレープフルーツジュースを片手にカナッペをつまんだ。まあ、参加者はともかく酒と料理はうまい。どこの金髪元帥のよつなことを考えて、夜風に当たろうと外に出たとき、一人の少年が転ぶのが目に入った。すかさず、フォローするぼく。グラスの割れる音がし、何名かがこっちを振り返ったが少年がけがをする事はなかつた。
「あ、有難うござります。」

緊張のあまりだろう。いまにも泣きそうな少年の為にぼくは炭酸水を2つ頼むと少年を外に連れ出した。

「ごめんなさい。」迷惑をかけてしまって・・・
バルコニーでぼくと少年は2人で話を始めた。

「君、名前は?」

「浅海です。浅海雄彦です。」

「そうか、浅海君か。パーティは今日初めて?」

「ごめんなさい。こういう場に慣れていないくて、緊張しちゃって・・・

・

「まあ、誰にでもこうこうことはあるだ。気にしない方がいいよ。」

浅海君、こつまで軽井沢にいるの？」

「ええっと……来週に帰ります。」

「そつか……じゃあ、うちにおいでよ。うちといつても、知り合いの別荘なのだけどね。」

「誰が知り合いですって！？」

外の方に姿勢が見ていたため、後ろからの気配に気付かなかつたぼく……振り返ると、満面の笑みを浮かべて、なおかつこめかみに少し血管の浮き出た絵里がいた。手にはさつきの炭酸水2つと何だらづ……シャンパンらしきものがある。外見は高校2年生だが内心はアバウト30のオヤジだからな……。

そんなことを考えていると、凸ピングが飛んできた。結局、今までの経緯を話すぼく。素で痛い……。

「次から気をつけないとダメよ。そうじやないとこの伯父さんになっちゃうからね！」

そつ言つて笑う絵里。明日、うちの別荘に來ることを約束して、雄彦君を見送つた。そして、真顔になる僕たち。

「そつちの方はどうだった？」

2002年5月25日 東京都武藏野市吉祥寺 13:00 視

点：麻耶

「おねえちゃん、あたしでいいの？」

姉にそう確認する私。

「いいよ。押しちゃいなさい。」

そつ言つ姉の声に従い、チャイムを押す私。

「はい。」

「本日はお招き有難うござります。大道寺です。」

「どうぞ。お入りください。」一樹さんの声がスピーカーからした。しばらくのち、ドアが開いた。

「ようこそ、いらっしゃい。待つていたよ。奈耶ちゃん、麻耶ちゃん。入つて。」そつ言われてあたしたちは久瀬家に入った。中では

すでに、早乙さん姉妹、成瀬三姉妹、浅海・椎名両家がいてかしましく話をしていった。

「いらっしゃい。奈耶ちゃん、麻耶ちゃん。」

キッチンから絵里さんも顔を出す。

「お久しぶり！」

みんながそう言ってあたしたちを出迎えてくれる。きっと、この人たちがいなかつたら、あたしたち姉妹はきっと心が折れていだらう・・・

1999年6月29日 東京都新宿区西新宿 新宿副都心 17：
00 視点：絵里

その日はちょうど父の会社に遊びに行っていた。まあ、そう言つことにしてこう。私の父は、世界的な投資顧問会社の代取をしている。そんなこんなで、前世の記憶を父に披露し、私と会社の為にその記憶を使い投資を行つた。結果は上々。今後跳ね返る分を計算すれば巨額を稼ぎ出したことになる。まあ、インサイダーじゃないよね。これって・・・

私は会社の自分のデスクのロイターの端末をいじり、ドル円やポンド円マルク円の為替相場を覗いた。その時、ニュースの欄に気になるものを見つけた。

「キルギスで邦人射殺。」

このニュースのところでダブルクリックをする。詳細なニュースが出了た。

「ロイター電。キルギス山間部でタジキスタン選挙オブザーバー大道寺豊一大教授が武装勢力に射殺された模様。」

私は会社の電話をつかみ、奈耶の家に電話をした。大道寺家と我が家は父が大学時代のゼミの同期ということもあり子供のころから知つていて、いとこのようなものだ。早く出て、早く出て。そう祈つて何回かホールをすると、受話器をとる音がした。

「はい、大道寺です……」

麻耶ちゃんの声がした。そして、私は内心呪いの言葉を百回唱えた。その声は・・・すぐ沈んでいた。多分、父の死を聞いたばかりなのだろう。私は落ち着いていった。

「麻耶ちゃん、お母さんかお姉ちゃんは？」

「いまいない・・・あたし一人で留守番しているの。お母さんもお姉ちゃんも、外務省に行くつて・・・おじいちゃんとおばあちゃんが来るまで、家で待つていなさいって・・・」

まずい。まずいぞ。このままではいたいけな小学校6年の少女がマスクの食い物になってしまう。

「わかった。いまからあたしが行くから、あたしが行くまでだれも入れちゃいけないよ！わかったね？」

そう言って、私は受話器を置いた。ちょっと考えて、私は総務に電話をした。

「永井さん？すぐにタクシーを呼んでください。そうです、で、行先は杉並区・・・」

時間はあまりない。ビルのエレベーターのボタンをこれほどには高速で連打する私。早く来いや！慌ててエレベーターに飛び乗り、駆け足でビルの外に出ると私は呼んでいたタクシーに飛び乗った。

「運転手さん。杉並まで！」

タクシーの中で、私は当時普及しだした携帯電話をかけた。

「はい。終です。絵里ちゃん、どうしたの？」

「一樹、冬休みにあつた大道寺さんのところ覚えていいる？」

「何？急に？覚えているよ。確か、T大の国際関係学の教授で中央アジア政治の権威だつたかな？確かに今頃・・・キルギスかどこかじやなかつたっけ？」

「その大道寺教授が、武装勢力に射殺されたよ！」

私は思わず叫んだ。

「・・・」

電話の向こうでは一樹が絶句している。

「わかった。僕はどうすればいい？」

「いめん。話を聞いてほしかつただけなの・・・後、今夜電話すると思ひからでて。」

「わかった。」

そう言って電話は切れた。

「なんでこうなったのだ・・・なんで―」

私は叫びだしそうになつたが、タクシーの中といふこともあり理性で抑えた。優しかつた大道寺のおじさん。そのおじさんがキルギスで亡くなるなんて・・・私は、純粹な怒りを感じた。そう、これまでにはない純粹な怒りを・・・

大道寺家の前でタクシーは止まつた。幸い、まだマスクは来ていない。最も、無言の帰宅、という際には押し寄せるだらうが・・・私は料金を払い、大道寺家のインターフォンを鳴らす。

「はい・・・」

もう口は暮れたといふのに、家には電気がついていなかつた。

「ドア、開けて。」

私がそう言うとドアが開いた。中から麻耶ちゃんが出てきた。

「お、おねえちゃん・・・」

そう言つて麻耶ちゃんは私の姿を確認すると、安心したのかぽろぽろ泣きだした。

「ちょ、ちょっとーー。」

私は慌てて麻耶ちゃんに駆け寄つた。当時小学校高学年。まだまだ少女だ・・・

「おねえちゃんは、ここにいてくれるよね。いてくれるよね・・・いまにもかき消えそうなか細い声で私を連呼する麻耶ちゃんを抱きしめながら、私は次にどうしようかを考えていた・・・

点・奈耶

その日、ショックを受けて帰宅したあたしとママが見たのは、真っ暗の部屋の中でソファに座っている一人の少女と、その腕の中で眠つている麻耶の姿だった。

「お邪魔しています。おばさま、この度は・・・」
麻耶がいるためだらり。立ち上がりなげにそのままの姿勢で絵里さんは言つた。

「絵里ちゃん、ありがとう。」

ママは感情を押し殺して笑顔でそう言つた。

「奈耶ちゃん、麻耶ちゃんを頼むね。多分いま必要なのは親戚のようなお姉さんじゃなくて、実の姉の愛情だと思うの。」

そう言つて絵里さんは麻耶を起こさないよう静かに退くと、立ち上がつて玄関の方に向かつた。

「どうあえず、今日は失礼します。明日、弔問をして来ます。」

そう言つて絵里さんの目に私は涙があるのを確認した。

「両親も・・・ショックを受けているでしょ。」

そう言つて、絵里さんは自分の家に帰つて行つた。

絵里さんが去つたのち、静かに寝ている麻耶の顔をあたしは優しく撫でた。ママは少し横になると書いて、部屋で休んでいる。パパがない今、あたしが麻耶を守らなくちゃならない。この日以来、あたしは決心した。強くなると・・・

視点：絵里

パスタのほかにピザを準備しなきや。そう思ふ、あたしはピザの窯の様子を見た。

我が家は本格的なピザ窯がある。おととしに設置したものだ。まあ、1998年に私が今のようになつてから、いろいろなことがあつたと思ふ。いろいろなことが新鮮に思える。だからこうして後輩を招いて昼食と一緒に取るうとしている。しかし・・・遅い。いつものことながらひと組、来るのが遅いところがある。私は携帯電話で彼

女の番号に電話をしようとしたとき、インターフォンが鳴った。

視点：芽実

全く・・・いつものことながら我が次姉には呆れる。あたしはそう思いながら、久瀬家のインターフォンを押した。

「ようこそ。今日は15分遅れぐらいですね。」

そう言って一樹さんが笑いながら家のドアを開けた。全く・・・隣で本を読みながら突つ立っている笙子お姉ちゃんのわき腹を私は小突いた。その痛みで正気を取り戻すお姉ちゃん。

「どうも、御招待有難うござります。」

「すみません。うちのバカ姉が迷惑をいつもいつもおかけします。」

「あたしは一樹さんに謝った。」

視点：一樹

まあ、いつものことのいつもの仲のよい双子の掛け合いなので、僕はそんなに気にしていない。新堂笙子さんと芽実さんは双子の姉妹。長姉の梨々さんは生徒会の執行部補佐の関係で今日は来られないらしい。芽実ちゃん、だいぶ笙子ちゃんに振り回されたようだ。数冊の古本を片手にご満悦の表情の笙子ちゃんとちょっと疲れ気味の芽実ちゃん。これで今日は全員そろつた。ダイニングに案内すると、すでに話声で賑やかな空間になっていた。

その光景を見ながら、若い女の子つていいなあと満面の笑みをたたえていると、横から殺氣を感じた。

「あのう・・・絵里さん？」

こめかみに青筋が立つている絵里にぼくは恐る恐る声をかけた。

「一樹君、ピザを運んでもらえるかしら？」

「Yes, Sir!」

僕は敬礼して、ピザを窓から取り出した。

2002年5月25日 東京都武蔵野市吉祥寺 15:00 視

点：一樹

賑やかな昼食後、それぞれ好きなことをして皆過ごしている。ある人はゲームをし、ある人はおしゃべりをし、ある人は・・・読書に夢中になっている。

そんな中、僕と絵里さん、雄彦と遙ちゃん。沙耶ちゃんの5人は地下にある絵里さんの書斎に入った。この部屋は1・2畳ほどあり、大きな本棚5つとテーブル、ソファーセットがある。読書好きのぼくと絵里さんが頼み込んで作つてもらつた城みたいなものだ。

「桜田門に行つてきたのだつて？」

絵里さんが紅茶を入れながら言った。思わず手が止まる雄彦。

「はい。警視庁の刑事部のお偉方に言わされました。うちに嘱託で入つてほしいと。」

考え込む雄彦。驚愕した様子で見る2人。

「実はね、警視庁からぼくらのところに相談があつたのよ。いや、探りを入れたという方が正しかもしれないな。」

僕は答えた。

「え・・・」

「まあ、平たく言つと警視庁嘱託の話をしたのはぼくらだよ。」

カップを持つてぼくは紅茶に口をつけた。視線の先には驚愕する3人がいる。

「しかし・・・なんで？」

「それはね、実はぼくらも何だ。」

正直にぼくは答えた。

「警察庁のあるお偉方に知り合いがいてね。その人から電話があつたのだよ。で、マスコミ対策の意味合いもあつて推薦したのだけど冗談半分だよ。」

まさか本当になるなんて・・・

「駄目です、ダメです、絶対ダメです！！」

遥ちゃんが身を乗り出して反対してきた。

「ほら、雄彦さん運動神経にぶいじゃないですか？！それに、目も悪いし、しかも高校生ですよ。そんな人が警視庁の嘱託とはいえ勤務できるはずがありません！」

おいおい・・・遙ちゃん興奮しすぎ。身を乗り出しすぎだつて。紅茶がこぼれそうだよ。雄彦に視線を向けると、ちよつと表情に怒りの色がさしていた。

「そうですよ！お兄ちゃん少し天然が入つていてるから、警察の人の足手まといになるじゃないですか？！それじゃあ警察の人がかわいそうですよ！」

かなりひどいことを言つてゐるな。沙耶ちゃん。案の定、雄彦が切れた。

「機会を与えていただきありがとうございます。せつかくの機会ですでの、私の全身全靈をかけて、怪盗ラファエルの捜査に協力します。」

あぢやー。やつぱりいつなつたか・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9850o/>

怪盗ラファエルを捕まえろ！！(The Hunt for phantom thief Raphael !!)

2010年12月28日21時59分発行